

文化

—20代の時に書いた文章が収録されている。「あとがき」には『そんな日本人に気を遣わなくてもいいんだよ』と若かりし(悩んではかりだった)自分を思い出し、抱きしめなくなったとある。「読んでいてこみ上げてくるものがあった。当時は東京で大学生。今なら沖縄とヤマトウのポジシヨナリティーの違いを言えるが、当時はそう二項対立的に考えることが良くないことのように思

2013 11/7

日本と出会い直す20年

むぬかちやー(ライター)の知念ウシさんの新刊「シランフナーの暴力 知念ウシ政治発言集」(未来社)が出版された。1990年、20代のころに書いた文章から2012年まで約20年の思考の歩みを収録する。日本人が沖縄を植民地状態にしていることを「シランフナー」知らんぷりしてゐるのではないかと問い掛け、そのことへの異議申し立てを沖縄人にすすめることで2者の「出会い直し」を促し得る本となっている。知念さんに話を聞いた。

(聞き手=城間有)

知念さん「シランフナーの暴力」発刊

沖縄と違い 自覚が道



「シランフナーの暴力」出版記念会であいさつする知念ウシさん=10月19日、那覇市内

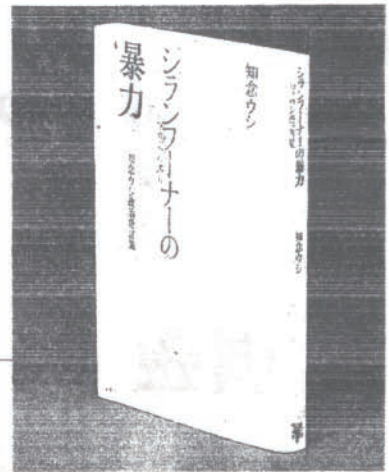
つていた。でも2者はやはり違うのではないかと、というための力を集めていた」

—1992年の『沖縄』と『日本』を越える」には、日本人女性との往復書簡という形式の中で、「沖縄と日本」という二分法によって自己認識したこと、同時に壁にもぶつかったことがつづら

る。その後の「だけど愛は泣いている」では往復書簡を終わらせて二分法を生み出している歴史的、政治的構造の意味に再びぶつかることになった」とあり、考えが固まってきた過程が読める。

「沖縄の人が背負わされている歴史的、政治的な立場は、どう考えても日本人とは違

知念ウシ著「シランフナーの暴力」



のだということに気づいた。沖縄の人が排他的とか心が狭いという話ではない。感情も理性も思考も尽くして行き着いた。そして今でも考え続けている」

「沖縄とヤマトウと二分法が作られている抑圧の構造は直っていない。それを乗り越えるためには、沖縄とヤマトウがそれぞれの立場性を自覚しなくてはならない。人は自分で選んで生まれてくるのではないが、社会の遺産や負債を負わされている。社会を良くしたいのなら、その立場性を自覚して仕事をしなくてはならない」

—沖縄の若い人たちと話してどう感じるか。

「講和条約発効の日を祝った4月28日の(政府式典の後)本土の人は沖縄のことを分かるとうしていない」と話すのを聞いた。植民地主義への怒りを敏感に持っている。18、19歳の人たちにも思わせるのは申し訳ない。沖縄大へリ墜落事件の現場を小生がのときに見ている学生もいて、語ってもらうと彼らが現代史の証言者なんだ、と感動する」

「今の沖縄でははつきりヤマトウに対する怒りを言うようになって、たたかれても個人的にひるむのではなく、社会的な厚みをつくっている。

だれか一人のリーダーが引張っているというより、それが決意しているように感じる」

—ヤマトウで発言するときはどうか。

「話を聞いてくれる人が多くなっている。以前はヤジを飛ばされたり怒鳴られたりしたのが、ほとんどない。それぞれの立場に立ち、考え行動している、信頼できる日本人たちに出会えている。以前より息がしやすくなっている」

—息がしやすくなったとは。

「前述の(往復書簡)や作家の池澤夏樹さんを批判した文章を書いたときは、こんなことを書いて孤立しないか不安になり書くまで決心が要った。それでも書くことを決めたのは、自分のウヤフヤアフシが苦勞させられて黙っていたはいけない、違うことは違うと言いたい、妥協してはいけないという気持ちだった。無理解なヤマトウの言いなりになりたくなかった」

—書いてきたことを振り返ってどう思うか。

「書くことで、どんなポジシヨナリティーでも問題意識を共有できる人と出会い、つながれるようになった。先輩たちが難儀をせず(次の段階に)進めるように、自分が悩んだことを書いていきたい」